

鳴弦墓目考

引用書目

日本書紀

侍中群要

宇治拾遺物語

布衣記

續世継物語

東鏡

源平盛衰記

義經記

禁秘御抄

古夏談

源氏物語

後醍醐院日中行事

增鏡

鎌倉年中行事

平家物語

太平記

禮記

通計十七篇

東歸
禮記通計十七篇
日本書紀
新羅書目

平貞丈著
禮記通計十七篇
日本書紀
新羅書目

鳴弦墓目考

平貞丈著

○或人曰日本書紀神代卷に天照太神臂著葦威之高鞆とあり鞆をばらるハ弦の多めなりハ鳴弦ハ神代より起ると云ふハと貞丈按ずるハ神代より起ると云ふハ弓ありりあるハハ鳴弦と云ふハ何と何とししハ云ふハの儀を記し多しハ神代の記より見えん日本書紀云舒明天皇九年蝦夷叛ラ以不朝即并大仁上毛野君形名為將軍令討還為蝦夷見敗而走而入壘遂為賊所圍軍衆悉漏城空之將軍

迷不志所為時日暮不踰垣不欲逃不方名不君不古名同

妻歎曰慷慨為蝦夷將見教謂夫曰汝祖孝渡

蒼海跨萬里平水表政以威武傳於後葉今汝

頓屈先祖之咎必為後世見嗤乃酌酒強之飲

夫而親佩夫之劔張十弓令女人數十俾鳴弦

既而夫更起之取伏伏而進之蝦夷以為軍衆

猶多而稍引退之於是散卒更聚亦振旅馬擊

蝦夷大敗以息膺○貞丈云國史又鳴弦と云

子の尺え多るいあまを始とてあまい法と云

法の徳なり

○辛亥お後よまめる寛治のちろあい海河院中在位

のゆめ其上夜に何れ多まぎも多まい時独あ

ましよ依し我れ相長と南殿の大帝よあて鳴弦と云

之夜の後高多よ前の階より守原我あとな案けま

中人身の老よしめて何れ何れいも多まいけり

と尺え多まを回しを原平盛表記よ我れ甲甲を

着しり家を帯して南庭よ立濟て殿上と睨て高多

よ後初帝よ六四代の孫多田新庵意満仲の三代好胤

伊勢子我れ入道り婿男前陰より守原我あ大内を守

あるも形ありしよやゆえに成来りし也とあり矢も射
落さずしなり

源氏物語 タケ子 云 暗燭 ばしてまじき 随分 是れも 法 明法

してまじき 中 君このく 境 たりけり

うら けり うら けり うら けり うら けり

雷子のふく うら けり うら けり うら けり

ぬい うら けり うら けり うら けり

なり うら けり うら けり うら けり

へい うら けり うら けり うら けり

禁秘御冊云雷鳴上古ハ上卿石具衛佐令候御前諸

衛警同次諸障見参令給祿近代不及如然之儀

雷鳴又送年疎近代如藏人持瀧口弓候御祿若

瀧口少々石御並合鳴弦御持僧参會之時念

念備其外無別事とあるは うら けり うら けり

且後醍醐院日中行変り 中 云 中 云 中 云

て 中 下 中 下 中 下 中 下 中 下 中 下

人 中 人 中 人 中 人 中 人 中 人 中 人

た 中 た 中 た 中 た 中 た 中 た 中 た

し 中 し 中 し 中 し 中 し 中 し 中 し

○平家物語云、大長門のつとむる中家のつとむるより、兼てせにやひて令
 穢丸給九文、皇子の心根、よめりて天をたて、天とし地をひて
 母と定め、たすふ海に、水余の、方士、東方、朝、うらむいと、物も、ち、
 心、天照太神、入、り、せ、あ、て、し、桑、ち、蓮、の、夫、り、て、天、地、四、方
 を、さ、せ、り、ふ、と、ん、え、あ、り、た、の、桑、の、ち、と、あ、る、ハ、張、り、の、中、の
 陰、陽、り、の、り、と、ん、蓮、夫、と、あ、る、ハ、暮、日、あ、る、を、あ、は、り、ハ、桑
 ち、蓮、夫、と、あ、る、ハ、あ、り、と、り、あ、る、と、あ、る、は、誕生、暮、日、の、り
 と、あ、る、人、の、あ、る、は、あ、り、あ、る、あ、る、あ、る、ハ、字、文、あ、り、し、人、は、れ、禮
 祀、の、内、則、ハ、男、子、生、ぶ、と、れ、ハ、別、桑、弧、蓮、夫、ハ、以、射、天、地、四
 方、と、あ、る、ハ、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、ハ、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、
 さ、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、
 ら、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、
 は、桑、の、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、
 是、今、の、世、の、誕生、暮、日、と、い、ふ、は、い、ち、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、
 この、
 ね、
 ○續世繩物語云、保延五年、ヤ、侍、り、る、ハ、つ、ち、の、と、の、を、り、
 の、年、五、月、十、八、日、よ、り、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、
 多、事、の、い、ぬ、事、ハ、院、の、ち、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、
 ち、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、
 の、ち、の、侍、り、る、事、ハ、桑、り、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、

礼記ハ、
 子の祝ハ、女子ハ、

○自天孫を遣らるる矢をまけりしとて赤色と云ふる矢の正
ふ替の迅速なりし問ふ替と容きん一瞬と云ふに
教示家の道あり物を費て替ひの極烈なりし他の
言旨の及ぶ如しなり人々及も其を歎くあり
たし是を思ふる心あり其の法と云ふる生地の身を
驚しその魂を奪ふべき以て法の名を以て其法者の怨
しき善目の心なきと述べてし其の心なき物多き
是是善目と射りしをさすなり

又云明法一善目を射て妖怪の邪と云ふる古代を
其例あり古代は明法は法と云ふ也善目の心あり善
目の矢を射るの如し後代は明法の法善目の法とて
法の字のなかり方術あり其方術或は神を交へて巫
祝より射るものなり或は真言の言相等を交へて僧徒の
似ありものあり是は弓矢の如し心も如く射て神佛
を交へるもの如くは是は弓矢の如く或は威も如
きもの如く或は巫祝も如く僧徒も如く
如く射るものあり其の如くも心も如く神佛も如く
如く矢の如く射て精神と云ふは是を以て弓矢の如
く或は威威も如く射て神佛と云ふは矢を射ると
いふに如く矢を射て巫祝僧徒と如く射てかくし

